

「など」「なか」の意味用法とその変遷

于 康

1 はじめに

古文に於ける、「副詞」とされてきた不定語^{註一}が、その不定を表す語義特性により「副詞」の中で如何に位置づけられるかは、種々の文法論の「副詞」の節に散見される。また、今まで、疑問表現の研究には多くの成果が挙げられており、其の中で不定語に対する考究もなされ、示唆を受ける所が多い。更に、作品別に幾つかの不定語の性格を究明しようとする研究も見られるが、体系的にこれを説く説は未だ見当たらない。^{註二}

「副詞」としての不定語は、近代までに数多く存し、意味用法も様々であり、現代日本語に見られない用法も存した。現代日本語では「いかが」と「擬古」用法の「いかに」を除いて、「など」「なか」「なぞ」「いかに(か)」「なでう」「なにしに」「なじか」等は既

に使用されなくなっている。これらの不定語の意味と用法の変遷過程を考究することによって、不定語の意味用法の特徴の全体像を体系的に把握することが可能となるであろう。

本稿は、以上の観点から、『古事記』『万葉集』『源氏物語』『覚一本平家物語』『天草版平家物語』『大蔵虎明本狂言集』を中心に、通時的立場から、「など」「なか」の意味用法と其の変遷に就いて、「いかに(か)」と対比しながら考察するものである。

2 本研究の立場

「文」は情報内容^{註三}を表す部分と話し手の気持ちを表す部分からなる。修飾成分がこの二つの部分に如何に係わるか、これは修飾成分の意味用法を明らかにする為の重要な条件であると考えられる。

不定語は、「内容的疑問表現」^{註五}に用いられ、「内容的問い」の表現

と「内容的疑い」の表現を構成するが、反語表現や詠嘆表現などにも用いられる。「内容的問い」の表現に於ける不定語は、情報内容の限定や細部にわたる説明を目指すものであり、情報内容の構成成分でもあるので、「詞」的性格を有するものであると考えられる。

「内容的疑い」の表現に於ける不定語は、情報内容の限定や細部にわたる説明を求める場合、「詞」的性格を有するものであるが、情報内容の限定や細部にわたる説明を求め、その疑問点の解消を目指すというよりは、話し手の心中に湧く疑念の表出の方が主たる目的であり、即ち情報内容を構成する成分というよりは、むしろ話し手の気持ちの表出を助ける場合、「辞」的性格を有するものであると考えられる。また、情報内容の限定や疑念の解消を目指す、明白に話し手が自分自身の用意しておいた解答の正確さを強調する場合に用いられる不定語を含む表現は、話し手の気持ちを取り立てる反語表現とみる。「疑問詞をふくむ反語表現も、じつは、その疑問詞による説明要求の疑問表現ではなく、みな判断をうちに藏しているにすぎない」ので、反語表現に用いられる不定語は、「辞」的性格を有し、「モダリティを表明することはあっても、命題の一部となることは決してない」(「モダリティ」と「命題」は、本稿でいう「話し手の気持ち」と「情報内容」のことである)と考えられる。なお、実際には、情報内容の限定や疑念の解消を目指しながら、述語文節の話し手の気持ちを表す部分と呼応して、話し手の主観的

な気持ちを表出するものもあるので、この場合の不定語は、「詞」的性格と「辞」的性格の両方とも有するものであると考えられる。

即ち、不定語は、情報内容のみ限定する場合は、情報内容の構成成分となり、話し手の気持ちのみ限定する場合は、話し手の気持ちの構成成分となるが、情報内容と話し手の気持ちの両方を限定する場合は、情報内容と話し手の気持ちの両方の構成成分となると考えられる。

3 奈良時代の『古事記』『万葉集』 に於ける「など」・「などか」

『古事記』に於いては、

1 阿米都々 知杼理麻斯登々 那杼佐祁流斗米

『古事記日本古典文学全集』165頁

が唯一の「など」の用例であるが、既に存在している。この例は、大久米命の鋭い目を鳥の目に譬え、「あなたの目はどうして入墨をしたような鋭い目をしているの」のように、答えを求める「内容的問い」の表現である。「など」は、情報内容を限定し、其れに就いて説明を求めようとするものである。

又、『万葉集』に於いては、

2・・・家の嶋 荒磯之字倍尔 打摩 四時二生有 莫告我 奈

臆可聞妹尔 不告来二計謀

『万葉集 鶴久・森山隆』以下同第509首

3 敷治奈美乃 志氣里波須擬奴 安志比紀乃 夜麻保登等芸須
奈騰可伎奈賀奴 第420首

のように、「など」は、「かも」「か」に伴われて使用されている。

2の「などもかも」は、「どうして妻にわけも話さずに来たのだから」のように、話し手が自分自身に其の原因を問い掛けるに止まらず、「わけを話すべきだ」という話し手の後悔の気持ちも表出している。^{註九}3の「などもか」は、藤の花の満開の時、「どうして来鳴かないのか」のように、通常くるはずなのに、「来鳴かない」のはどうしてであろうという原因や理由を問いただすと同時に、「くるべきだ」という話し手の気持ちも表出している。この二例は共に、「か」

の下接によって、疑問語が強く指示され、「話すべきだ」「くるべきだ」という話し手の気持ちの表出に傾くこととなるであろう。

『かき抄』では、「などもか」を、単独に立項して、「かろくとがめうたがひたる詞」の「なども」と異なる「もどきとふ詞なり」とされ、「なども」と「などもか」との間に意味用法上の差の存在を指摘している。不定語Nの下につく「か」の意味機能を「その不定詞を強く指示」^{註十}すると解かれる飯倉篤義氏の解釈を考えると、この「なども」と「などもか」との意味用法上の違いは「か」によるものであると解釈できるであろう。「などもか」は、「か」に強く指示されるため、情報内容の生起の「原因や理由があり得るか」と強く疑われることによって、話し手の主観的な判断の気持ちが表されているから、「文」

に於いて、「なども」と異なって、情報内容の部分のみに係るのではなく、話し手の気持ちを表す部分にも係ると考えられるであろう。

従って、「なども」が、「詞」の性格を有するとすれば、「などもか」は、「詞」「辞」の性格を両方とも有するといえるであろう。^{註十四}奈良時代には、実例が少ないが、右に挙げた用例から、其の一端を窺うことが出来るのではないかと思われる。

4 平安時代の『源氏物語』に於ける

「なども」・「などもか」

4-1 他の副詞的不定語について

扱、平安時代に入ると、和文文献には、「なども」「などもか」の使用が著しく増加した。^{註十五}又、新成員の「いかに」「いかが」が加わり、「副詞」として用いられた不定語の中で多用されたのは「いかに」「いかが」「いかに」「いかに」「なども」「などもか」であるが、それぞれに意味用法の役割分担があったようである。これらの不定語の意味用法については、既に別稿で検討しているので、省略するが、その要旨は次のようになる。^{註十六}

「いかに」（文中用法）は、文がどんな形で終止するかは重要ではなく、表現主体の気持ちと関係せず、直接的に動作主体の動作・状態や動作等の生起の手段・方法などについて細部にわたる説明を求めようとするものであり、「いかに」其れ自身が「詞」である。

「いかが」は、必ずしも述語文節に呼応を求めないが、動作主体の動作を含む情報内容の状態・程度や生起の手段・方法などについて説明を求めようとすると同時に、話し手の気持ちも表出する「詞」「辞」両方の性格を有するものである。

「いかで（か）」は、述語文節に呼応を求め、主として話し手の主観的な気持ちを直接的に表す希望表現や反語表現に用いられているが、たとえ疑問表現に用いられたとしても、疑念の解消を目的とせず、専ら話し手の心中にわく疑念を予め表出する、「辞」の性格を有するものであるといえそうである。

これを要するに、「いかに」は、専ら動作を限定するものであり、「いかが」は、情報内容を限定すると同時に話し手の気持ちも表出するものであるが、「いかで（か）」は、専ら話し手の気持ちを限定するものであると思われる。

4-2 「など」・「なか」

地の文にも会話文にも用いられる「いかで（か）」と異なって、平安時代の和文に於ける「など」「なか」は、地の文に用いられず、殆ど会話文に用いられ、また、述語文節に推量の助動詞や終助詞の呼応を必ずしも求めないという大きな特徴が見られる。^{註七}

4 「など、かく、いぶせき御もてなしぞ。思ひのほかに、心憂くこそおはしけれな。人も、いかにへあやし」と思ふらむ」とて、

『源氏物語日本古典文学大系』葵1・358頁巻数・頁数以下同
5 「昨日は、など、いと疾は、まかでにし。いつ、まありつるぞ」
など、の給ふ。

源氏紅梅4・243頁

6 「……。かろくしく、なかかく、わたしたてまつり給ふ。こなたに渡りてこそ、見たてまつり給はめ」との給へば、

源氏若紫3・294頁

例えば、5は、兵部卿宮は、若君に、「昨日は、どうしてはやばやと退出してしまつたの。今日はいつやつて参つたのか」と問い掛けた場面である。「なか」は、聞き手に問い掛ける「内容的問い」の表現に用いられ、情報内容の生起の原因や理由について、細部にわたる説明を求めようとするものであり、情報内容の知的内容量に對して、増減の影響を及ぼすものであらう。^{註八}

7 「今更、など忍び給ふらむ。この膝の上に御殿籠れよ。いますこし寄り給へ」と、の給へば、

源氏若紫1・216頁

例の7は、若紫の「さあ行こうよ。眠たいの」という呼びかけに對して、源氏が「いまさらどうしてお逃げになるのでしょうか。この膝の上にお休みなさいよ。もう少しこちらにお寄りなさい」と言つた場面である。「など」は、矢張り情報内容を限定するものである。「文」に「行かないで」という情意が含まれているとすれば、其れは、情報内容の生起の原因や理由を問うことによつて、間接的に反

映されたのであろう。

扱、『源氏物語』には、「などか」も同様に必ずしも推量の助動詞や終助詞の呼応を求めないが、推量の助動詞が存在する際には、「む」が圧倒的に多く、「べし」は二例しかない。此のような特徴は、同時代の他の和文文献にも見られる。

8 へなどか、さしもあるべき。もとより、いたう思ひつき給ふ事なくて、『かくまでかしづかん』とも、思し立たざりしを、・・・

源氏乙女？ 296頁

9 御有様を、乳母もかたりて、いみじう泣きまどふ。おとどなどのおぼしたる気色ぞ、いみじきや。「昨日今日、少しよろしかりつるを。などか、いと弱げには、見え給ふ」とさわぎ給ふ。

源氏柏木 4・18頁

8 は、「内大臣が仰せられる理由がどうしてあろうか」のように、大宮が内大臣を恨めしく思った場面である。この「などか」は、情報内容の生起の理由の存在に就いて、話し手が自分自身に問い掛けると同時に、話し手の「そんな理由はないだろう」という主観的気持ちも読み取れる。9 は、「昨日今日は多少よろしかったのに、どうしてひどく弱られたのか」という致仕の大臣が騒いだ場面である。「などか」は、原因や理由に就いて説明を求めようとするが、話し手の心にわく、そうやってほしくない気持ちも表している。

ところが、「などか」は、話し手の主観的な気持ちの表出に係わ

るが、専ら話し手の主観的気持ちを予め表出する「いかで（か）」と異なって、情報内容を限定しながら話し手の気持ちも表出するものである。従って、「いかで（か）」のような話し手の主観的な気持ちの露骨な表出を回避することが出来る。^{註九}

右の用例の分析に見られるように、「など」や「などか」は、形態面では、必ずしも推量の助動詞や終助詞の呼応を求めないという特徴がある。しかし、意味用法に関する限り、「など」や「などか」には、「内容的問い」の表現に用いられるという共通点もあるが、其の一方では「など」は、情報内容のみを限定し、その細部にわたる説明を求める為に用いられ、「などか」は、情報内容を限定しながら、話し手の主観的な気持ちを表しているという違いが見られる。即ち、「など」は、「詞」の用法の特性が目立つが、「などか」は、「詞」と「辞」の二重性格を有する。この時代の「など」「などか」「いかで（か）」の用法の特徴を整理して図式に表せば、表1から表3のようになるであろう。

表1 「など」



表2 「なかか」「なかかは」

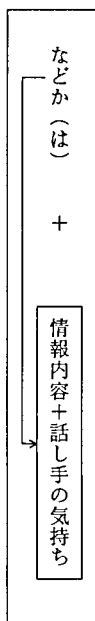
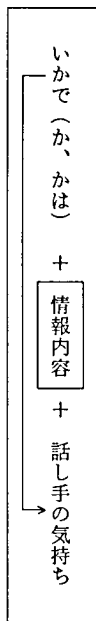


表3 「いかで」「いかでか」「いかでかは」



5 鎌倉時代の『覚一本平家物語』

に於ける「など」・「なかか」

鎌倉時代に入ると、『覚一本平家物語』(以下『覚一本平家』と略す)が示すように、「など」・「なかか」に大きな変化が見られる。^{五二}先ず、形態面に就いて見てみたい。『源氏物語』と対照して述語文節に現れる推量の助動詞や終助詞の状況を表4に纏めてみた。

表4

物語		平家		物語		源氏					
なかかは	などか	なかか	など	なかかは	なかか	など					
反語	疑問	反語	疑問	反語	疑問	反語	疑問	反語	疑問		
1		6				24	3		2	む	
			1				5	2	9	らむ	
				1			3		5	けむ	
					1		3			まし	
					2		1			まし	
1		25					2		1	べし	
					7			1		ぞ	
								17	1	12	
						5	3	9		6	
2	0	31	1	0	8	15	1	33	41	3	38
											合計

『源氏物語』では、「など」・「なかか」は述語文節に必ずしも推量の助動詞や終助詞の呼応を求めなかったが、『覚一本平家』では、全ての用例の述語文節に推量の助動詞や終助詞が存在している。又、「など」は専ら「ぞ」と呼応して、疑問表現に用いられ、「なかか」は、専ら「べし」や「む」と呼応して反語表現に用いられるという形態的特徴が見られる。^{五二}

『覚一本平家』に於いて、「など」の用例は八例あるが、述語文

節に、「けむ」の存在する一例を除いて、全て「ぞ」が存在する例である。

10 入道「など祇王は返事はせぬぞ。まいるまじひか。参るまじくはそのやうをまふせ。浄海もはからふむねあり」とぞの給ひける。

『平家物語日本古典文学大系』（以下「寛一」と略す）上巻99頁例の10は、入道が使者を立てて祇王に「仏を慰めてくれ」と伝えしたが、祇王は全く返事をしてくれなかった。これに対して、入道は「どうして祇王は返事しないのだ」と言った場面である。入道は祇王がなかなか返事をしない原因を知りたいのであるが、「返事すべきだ」という判断も表し、祇王に対する不満も明らかである。これは「まいるまじひか」以下の句からも読み取れるであろう。即ち「など」は、『源氏物語』の「など」とは異なり、情報内容について説明を求めようとすると同時に、話し手の気持ちの表出にも傾くようになったという変化が見られる。

11 「たとひ入道いかなるふし議を下知し給ふとも、など重盛に夢をばみせざりけるぞ。凡は資盛奇怪なり。・・・」とて

寛一上巻120頁

例の11は、前句の逆説仮定条件を表す接続助詞「とも」の存在によって、後句は、意味上其れと反対の結果となる。^{三二}この場合の「など」は、話し手の「知らせるべきだ」という判断の表出側面に傾いている。平安時代の「などか」の意味用法に近似するのではないか

と思われる。

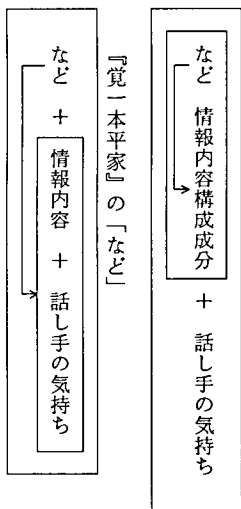
12 「・・・。それをかぎりとだにおもはましかば、などのちの世とちぎらざりけん」と、思ふさへこそかなしけれ。・・・」

寛一下巻229頁

例の12は、明日の合戦できっと討たれてしまおうと言われたので、妊娠中の「わたし」は、「もしもその時が最後だとさえ思ったならば、なんで後の世でお会いしようとする約束しなかったのだろう」と回想する場面である。現実仮想を表す「・・・ましかば」に導かれる「など・・・けむ」に、情報内容の生起の原因や理由を問う意図が存在していたとしても、其れは既に希薄であり、寧ろそこには話し手自身の咎めや後悔の気持ちを強く感じさせる。

右のように、形態面に大きな変化が見られる「など」は、意味用法にも、かなりの変化が見られる。図式にすると、表5のようになるであろう。

表5 『源氏物語』の「など」



即ち、『寛一本平家』に於ける「など」は、情報内容を限定するだけではなく、話し手の気持ちも表出し、「辞」的性格も有するようになったという変化が見られるのではないかと考えられる。

ところが、最も大きな変化を見せたのは、「なか」である。平安時代の『源氏物語』では、述語文節に、「む」「らむ」「けむ」「まじ」「ぞ」が存したり、文が連体形で終止する「なか」は、疑問表現にも用いられたが、鎌倉時代の『寛一本平家』に於いては、

13 物かかと君がいひけん鳥のねのけさしもなかかなしかるらむ

寛一上巻340頁

の一例しか「らむ」と呼応して疑問表現には用いられないのである。又、此の一例は歌に用いられたものであるから、平安時代の用法の痕跡と見ても良いであろう。他の例は全て「べし」または「む」と呼応して反語表現に用いられているのである。即ち、鎌倉時代の『寛一本平家』では、「なか」は疑問表現に用いられなくなったといえそうである。

形態面を見ると、『源氏物語』には、「なか」の述語文節に「べし」の存在する例は僅か二例しかなかったが、『寛一本平家』では、「らむ」と呼応する一例を除いて、残る三十一例のうち二十五例が「べし」と呼応する例であり、残る六例は「む」と呼応している。

此処で注目すべき点は、「いかで（か）」の場合も同じような現象が見られることである。『源氏物語』には、「いかで（か）」が「べし」

と呼応する用例は全用例の三百三十四のうち、十六例しかないが、『寛一本平家』には、五十三例のうち、四十五例にそうした呼応が見られる。此の「なか」と「いかで（か）」の形態上の変容の生起は意味用法に於いて相互に受容することがあり得ることを示唆していると考えられる。

14 「……何と【しても】命は大切の事なれば、此度こそもれさせ給ふ共、つゐにはなかか赦免なうて候べき」となぐさめた
まへ共、
寛一上巻215頁

例の14は、赦免状に名前のない俊寛を、少将は「なんとしても命は大事ですから、今度は赦免にお漏れになっても、最後にはなんで赦免されないことがありますか」と言つて、慰める場面である。赦免されない人を慰めるのであるから、話し手の聞き手に働きかける主観的判断を強調することが必要である。「なかか・べし」は其の役割を果たすものであろう。然し、元々専ら話し手の主観的な気持ちを表し、反語表現に用いられるのが、「いかで（か）」の意味用法の特徴である。「なか」が使用される以上、その意味用法は「いかで（か）」の領域に入り込み、「いかで（か）」の意味用法に近づいたと¹³考えられる。又、

15 「……御嘆の色、一事も是をみず、たとひ入道がかなしみを御あはれみなく共、なか内府が忠をおほしめし忘れさせ給ふべき。たとひ内府が忠をおほしめし忘れさせ給ふ共、争か入

道が嘆を御あはれみなからむ。……」 覚一上巻252頁

16 「……しかれば重盛が身佛鉢にあらず、名醫又善婆に及ぶべからず、たとひ四部の書をかぐみて、百療に長ずといふ共、いかでか有待穢身を救療せん。たとひ五經の説を詳にして、衆病をいやすと云共、豈先世の業病を治せむや……」

覚一上巻244頁

のように、反語を表す場合、「などか」↓「いかでか」↓「豈」という程度の差が存在するかどうか断定できないが、「などか」に、情報内容の増減に係わらず、専ら話し手の気持ちを表出するという意味用法の存することが明らかに見て取れる。更に、

17 「われをこそすため、さまをさへかへけん事のうらめしさよ。

たとひ世をばそむくとも、なかかかくとしらせざらん。人こそ心つよくとも、尋てうらみん」とおもひつゝ、

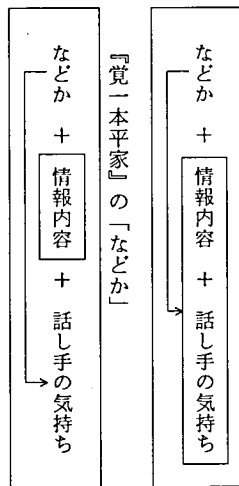
覚一下巻268頁

18 「……、たとひいかななるふしぎありとも、一度はなかか対面なかるべき。……」 覚一下巻364頁

のように、「なかか」の文には、前句に逆説仮定条件を表す接続助詞の「とも」がよく現れる。此の「とも」によって、後句の「なかか・べし」の表出する話し手の主観的判断が一層強められる。実際、例の14／18に於ける「なかか」を「いかで（か）」に置き換えても、意味用法に於いては等価のものと思えても良いであろうと思

われる。即ち、意味用法に於いては、

表6 『源氏物語』の「なかか」



のように、「なかか」は、話し手の気持ちのみに係るという用法移転の変化が見られるであろう。其の根拠は、用例から示される言語事実と、情報内容の細部にわたって塗り上げられる意味用法を失った以上、話し手の気持ちを表す意味用法しか有しないこととなるところに求められるのではないかと考えられる。

このように、意味用法に於いて、「なかか」は話し手の気持ちの表出に傾くことにより、そして一方、「なかか」は述語文節の話し手の気持ち（主観）を表す部分と共起して、専ら話し手の気持ちを表すことにより、「いかで（か）」が元來表した領域に近づいていった。又、「いかで（か）」も変化を見せた。其の結果、「いかで（か）」のみで、「なかか」「なか」の意味用法を十分カバーすることができるようになったといえそうである。これが、恐らく「なか」「なかか」が、「いかで（か）」より先に姿を消すことになる重要な原因ではな

いかと推測される。

6 室町時代の『天草版平家物語』と江戸時代の『大蔵慶明本狂言集』に於ける「など」・「などか」

室町時代に入って、特に『天草版平家物語』（以下『天草版平家』と略す）に於いては、「いかで（か）」が依然として存するが、「など」は既に姿を消してしまった。「などか」も、「よにも苦しきうで、などか思いをくことがなうてわござらうぞ？天草4/33」の一例しか存しない。其の代わりに登場してきたのが「なぜに」である。

「なぜに」の語源に就いては、「なにし」が「なじ」↓「なぜに」に転じたという説と、「なにせむに」が「なぜうに」↓「なぜに」に転じたという説があるが、いずれにしても、文中に於いて、「など」や「などか」が、共に「なぜに」に代替されたという言語事実が存し、問題となるのは、此の「なぜに」が、「など」や「などか」の意味用法を有するか否かという点である。「なぜに」の意味用法については、既に別稿で検討したので、ここでは「など」「などか」との関わりを検討して見て行くことにする。

次に対照の便宜を図るため、『覚一本平家』の用例を先に、『天草版平家』の用例を次に、並べて挙げる。

19人々皆おもはずげにぞ見給ひける。車よりおり給所に、貞良つ

（ツ）と参（ツ）て、「などこれ程の御大事に、軍兵共をばめしくせられ候はぬぞ」と申せば、
覚一上巻159頁

19' 清盛を初めて人々皆不審さうに見られた。車より降りらるるところへ、貞能つと寄って、「なぜにこれほどの御大事に軍兵どもをば召し具せられぬぞ」と申したれば、

『天草版平家物語』（以下「天草」と略す）1・30・10巻・頁・行、以下同

20「たとひ入道いかなるふし議を下知し給ふとも、など重盛に夢をばみせざりけるぞ」……
覚一上巻120頁

20' たとひ清盛いかなる不思議を下知せらるるとも、なぜに重盛に夢ほどなりとも知らせなんだぞ？
天草1・17・17

形態面に於いては、「など……ぞ」は、「なぜに……ぞ」に変容した。又、「など」「などか」と呼応してきた「べし」や「む」などは既に存しなくなり、終助詞の「ぞ」（か）に統一された。このような変容が「いかで（か）」の用例にも見られる。山田潔氏によれば、「『疑問詞……ベキ』が『疑問詞……ウソ』の構文そのものになったのである」ということになる。

19'、20'の文の構造は19、20の其れと同じであり、而も文脈も同様であるから、「なぜに」は『覚一本平家』の「など」の意味用法を踏襲し、情報内容を限定すると同時に話し手の気持ちも表出するものであるといえそうである。

ところで、鎌倉時代の『覚一本平家』で「など」とは区別されてきた「なか」も、『天草版平家』では、

21「……、いましばしもなか見ざらん。親となり、子となり、

夫婦の縁をむすぶも、みな此世ひとつにかぎらぬ契りぞかし。……

・ 覚一上巻 238頁

21'今しばしも見ようものを！親となり、子となり、夫婦の縁を結ぶも、みなこの世ひとつにかぎらぬちぎりぢやに、……

天草1・91・3

のように、『覚一本平家』の反語表現の「なか見ざらん」が、『天草版平家』に於いて、「見ようものを！」のように、直接的な表現に変わった例も見られるが、その多くは、「など」の場合と同じように、

22「……、今度こそめさせ給ふ共、つめにはなか赦免なう

て候べき」となぐさめたまへ共、 覚一上巻 215頁

22'たとこの瀬にこそめさせらるるとも、つめにわなせに赦免

なうてあらうずるか、慰めらるれども、 天草1・75・16

23「……。おのこの身にてさぶらはば、わたらせ給ふ嶋へも、

なかかまいらでさぶらふべき。……」 覚一上巻 237頁

23'男子の身でござらば、住ませらるる島えも、なせに参らいでこ

ざらうぞ？ 天草1・90・1

のように、「なせに……ぞ」に変容している。更に、

24「……見参するほどにては、いかでか声をもきかであるべき。いまやう一つうたへかし」との給へば、 覚一上巻 97頁

24'祇王が申しすすむるによつて見参わしつ、見参するほどでわ、

なせに声を見聞かいであらうぞ？ 天草2・96・2

のように、『覚一本平家』に於ける「いかでか……べし」が『天草版平家』に於いて「なせに……ぞ」に変容した例も見られる。

このように、『天草版平家』に於ける「なせに」は、「など」や

「なか」の意味用法だけでなく、「いかで（か）」などの不定語の意味用法も有しており、不定語の意味用法を包括する機能を有するものであると考えられる。^{五二七}

『天草版平家』から凡そ五十年後の江戸時代の『大藏虎明本狂言集』には、表7のように、「なか」は四例、「いかで」は二例、

「いかでか」は三例しか見られないが、「なせに」は三十九例も見られる。「なか」は四例のうち、三例は「べし」と呼応し、一例は「まじし」と呼応している。「いかで（か）」も同じで、「む」「らむ」「べし」と呼応している。然し、室町時代に於いて、不定語を含む文の述語文節の推量の助動詞や終助詞は「う」や「ぞ」に変容している。此の「なか……べし」の用法は、『覚一本平家』の用法の特徴であり、「いかで（か）」の用法は、表8と表4で示しているように、『天草版平家』の用法ではなく、平安時代の用法であるから、「擬古」の用法と考えられる。従つて、「なせに……ぞ」

が、『天草版平家』に於いて、既に一般的な用法として定着していったといえるのではないかと考えられる。

表7 『大蔵虎明本狂言集』の「なぜに」「などうか」「いかで」「いかでか」

	べき	ぞ	む	らむ	省略	ましい	まい	○	合計
なぜに		25			6		1	7	39
などうか						1			0
いかで	1		1						2
いかでか				1					3
合計									

表8 『天草版平家』の「いかで」「いかでか」

いかで		いかでか							
疑問	反語	疑問	反語	ぞ	(う)ぞ	(うずる)ぞ	(まい)か	う	合計
	1								
	7								
	1								
			1						
	3								
	12		1						

7 終わりに

以上の検討で明らかになったことを整理してみると、次のようになる。

一、「など」や「などうか」は、奈良時代に既に現れている。「か」

が下接するか否かによって、構文的機能と意味用法には差が見られる。「など」は、情報内容のみを限定し、情報内容の構成成分でもあるが、「などうか」は、情報内容と話し手の主観的な気持ちの両方を限定するものである。

二、平安時代に入ると、『源氏物語』では、「など」や「などうか」が、述語文節に推量の助動詞や終助詞の呼応を必ずしも求めないという形態面の特徴が見られるが、奈良時代の意味用法を踏襲するものではあると考えられる。

三、鎌倉時代に入ると、『覚一本平家』では、「など」や「などうか」に於いて、述語文節に推量の助動詞や終助詞の共起を求めるといふ形態面の大きな変化が見られる。又、「などうか」は、主として「ぞ」と呼応して疑問表現に用いられ、「などうか」は、主として平安時代に述語文節に殆ど現れない「べし」と呼応して反語表現に用いられるという特徴も見られる。更に、意味用法にも大きな変化が起こった。「など」は、今迄情報内容のみを限定してきたが、『覚一本平家』に於いては、話し手の主観的な気持ちも限定するようになった。又、「などうか」と「いかで(か)」との間に共通点が見れ、意味用法に於いて、相互に重なり合い、混在する例も現れた。これは、「など」「などうか」が、「いかで(か)」より先に姿を消してしまふ重要な原因でもあると考えられる。

四、室町時代になると、『天草版平家』では、「など」と「などうか」

は、既に使用されなくなり、其の代わりに登場したのが「なぜに」である。「など」と「などか」の意味用法は、一部は「いかで（か）」に吸収され、一部は、「なぜに」に相容し、また、他の形式に相容したのもあると考えられる。

五、江戸時代の『大蔵虎明本狂言集』では、「など」と「などか」の用例が存しているが、その述語文節の推量の助動詞や終助詞を見ると、『天草版平家』時代以前の呼応用法であることがわかる。即ち、『大蔵虎明本狂言集』に於いて、「など」と「などか」は、擬古の用法として使用されているといえる。

以上検討してきたことを纏めてみると、表9と表10となる。

表9 「など」「などか」の史的変遷

なぜに	奈良時代	平安時代	鎌倉時代	室町時代	江戸時代
いかで（か）			擬古用法	擬古用法	擬古用法
などか			擬古用法	擬古用法	擬古用法
など			擬古用法	擬古用法	擬古用法

表10

江戸時代 狂言集	奈良時代 古事記 万葉集		平安時代 源氏物語		鎌倉時代 平家物語		室町時代 天草版 平家物語		江戸時代 狂言集	
	なぜに	などか	なぜに	などか	なぜに	などか	なぜに	などか	なぜに	などか
なぜに	×	○	×	×	×	×	×	×	×	△
いかで（か）	○	×	×	×	×	×	×	×	×	△
などか	×	○	×	×	×	×	×	×	×	△
など	×	○	×	×	×	×	×	×	×	△

(△) 疑念解消を志向しない場合もあることを指す)
 以上の検討を通して「など」や「などか」の意味用法と其の変遷の目処を大体つけることが出来たのではないかと思われるので、敢えて拙論を提出して、大方の叱正を仰ぎたい。

注一 不定語の定義は尾上圭介に従う。尾上圭介「不定語の語性と用法」

渡辺実編『副用語の研究』明治書院1938年404頁。

注二 個別の不定語（古代語）に関する本テーマに関連する論文として、著書に収録されるものを除いて、次のような論文がある（但し疑問表現の論文は含まない）。土岐武治「堤中納言物語むしめづる姫君の『いかでわれ』考」『国語文化研究所『国語研究』19、1934年。木下正俊「『なに』と『いかに』」『万葉学会』『万葉』第四十四号1933年。船城俊太郎「今昔物語集の疑問副詞『何ソ』『何ト』『何テ』」『国語学会』『国語学』77武蔵野書院1933年。大鹿薫久「万葉集における不定語と不定の疑問」『国語学会』『国語学』165武蔵野書院1951年。磯部佳宏「不定語『いかで』の構文的性格―意味用法・表現性をめぐって―」『山口国文』第11号1938年。同氏「『今昔物語集』の要説明疑問表現―『疑問詞―ニカ。』形式を中心に」『梅光女学院大学』『日本文学研究』第二十七号1932年。同氏「『平家物語』の要説明疑問表現」『明治書院』辻村敏樹教授古稀記念日本語史の諸問題1992年。島山義和「『源氏物語』中心に見る疑問詞の扱い―『いづくの』『なにの』『なぜの』『なでふ』の用法―」『湘南文学』5・61972年。片山武「万葉集の疑問副詞について（一）」『金城学院大学論集84』1931年。同氏「題名同前（二）」『金城学院大学論集94』1933年。

注三 「叙述内容」「命題」「ことがら」とも称される。

注四 話し手は「表現主体」ともいう。話し手、語り手、書き手のことを指す。話し手の気持ちは「陳述」「話者の心的態度」「モダリティ」とも称される。

注五 宮地裕氏は『新版文論』（明治書院昭和五十四年1979年）に於いて、疑問表現を「説明要求の疑問表現」と「判定要求の疑問表現」に分類される。然し、山口堯二氏が『日本疑問表現通史』（明治書院1990年20頁）

に於いて指摘されるとおり、「・・・要求」は「問い」の性格が強い。従って、本稿は阪倉篤義説に従うことにする。阪倉篤義『日本語表現の流れ』岩波書店1933年147頁参照。

注六 「詞」「辞」の定義は、時枝誠記説に従う。時枝誠記『日本文法口語篇』岩波書店1933年。

注七 宮地裕前掲著書83頁。

注八 中右実「文副詞の比較」（国広哲彌編『日英語比較講座第2巻文法』大修館1930年）161頁

注九 『万葉集1日本古典文学全集』（小学館昭和58年1983年）309頁の頭注に於いて、「自分の事情も言わずに来てしまったことを後悔していう」と解釈される。

注十 『万葉集4』（同注八）325頁の頭注に於いて、「ナドはナニトの約。どういうわけ、の意で、来鳴かないことの意味的な理由を問いたたず疑問副詞」と解釈される。

注十一 阪倉篤義前掲著書153頁参照。山崎良幸氏は『古典語の文法』（武蔵野書院1987年）261頁に於いて、「か」の下接することによって、「疑問う焦点は『や』『か』の上接語におかれていてと解することができるでしょう」と指摘されている。

注十二 『かさし抄下』福井久蔵編『国語学大系第一巻』国書刊行会1952年84頁。

注十三 同注十一。

注十四 即ち、文全体を修飾するものと考えても良い。

注十五 宮島達夫『古典対照語い表』笠間書院1972年も参考にして、筆者の採取した例をあわせて得た結果である。

注十六 拙稿「中古和文に於ける『いかで』『いかに』『いかが』の機能」（『山口国文』第十九号1936）によつて。

注十七 『源氏物語』に於いては、「など」「なか」の用例が112例あるが、そのうち、連体形で終止する例は30例存する。

注十八 渡辺実『国語構文論』1971年310頁。

注十九 筆者の修士論文「不定詞『いかに』について―『源氏物語』を中心に―」(1995年)の調査結果である。

注二十 磯部佳宏氏も「不定語『いかに』の構文的性格―意味用法・表現性をめぐって―」『山口国文』第11号(1988年)に於いて、此の現象を指摘される。

注二十一 磯部佳宏氏の注二十の論文の調査結果と一致する。

注二十二 山田孝雄『日本文法講義』宝文館1994年205頁。

注二十三 磯部佳宏注二十の論文65頁。

注二十四 文レベルの話し手の気持ちは、推量の助動詞や終助詞、それ以外の助動詞と用言の終止形態、及び、プロソディによって表される。

注二十五 山口佳紀氏は『古代日本文体史論考』(有精堂1983年)102頁に於いては、「ナニト(何と)がナドに転じ、ナニシ(何し)がナジ・ナゼに転じたのと同様に考えられる」と言われている。また、大野晋・佐竹昭広・前田金五郎編『岩波古語辞典補訂版』(98頁)には、「なぜに」は「なぜうに」の転、「なぜうに」は、「ナニセムニの転」とされている。

注二十六 山田潔「助動詞『ウエ』の表現性」『国語国文』60-6、1991年。

注二十七 拙稿『天草版平家物語』に於ける『なぜに』の意味用法―広島大学日本語教育学科紀要1996年。

注二十八 築島裕氏は『平安時代の漢文訓読語につきての研究』(東京大学出版会1989年)に於いて、此の現象を指摘されている。又、松城俊太郎氏も前掲論文に於いて、「など」を「和文調の語『何下』」と称される。

●『天草版平家物語』の表記は、江口正弘『天草版平家物語対照本文及び総索引本文編』明治書院1989年に従う。

主な参考文献…(注に取り上げた著書は含まない)

山田孝雄『日本文法学概論』宝文館1990年

南不二男『現代日本語の構造』大修館1974年

『現代日本語文法の輪郭』大修館1983年

北原保雄『日本語助動詞の研究』大修館1984年

仁田義雄・益岡隆志編『日本語のモダリティ』くろしお出版1989年

—う・こう、本学大学院博士課程後期在学—